

マスター（回想）

えー、皆さんいつもご来店ありがとうございます。
アイドルお忍びバー時空のマスターZIKUです。
今日は、かちゃんが自分の夢を叶えるため、ハリウッドへ旅立つ日。
かちゃんの事を大好きな僕は、正直、行って欲しくありませんでした。
そんな僕にかちゃんは、もし行って欲しくないなら、空港に引き止めに来て
ていうんです。
ハリウッドで活動するのは、かちゃんの夢…
それを、ただ僕と一緒に居て欲しいから…なんて理由で止められるはずないじ
やないですか。

見送る事もできず、ただ僕はバーで、今もお店を開ける準備をしていました。

（食器を洗う音SE）

（合図だします）

赤岩ちゃん
いいんですか？ 今日かちゃん、ハリウッド行っちゃう日ですよね？

マスター
え？…ああ、そうだね…

赤岩ちゃん
そろそろ、行かないと、飛行機でちやいますよ。

マスター
うん、僕はいかないよ。お店の準備もあるからね…

（食器を洗う音SE ストップ）

（合図出します）

かちゃん（回想）
どうも！かちゃんです。

私は今、空港で東京行き飛行機を待ってます。東京へ行くというより、
まず東京へ行ってロサンゼルスへ乗り継ぎます。
私が夢みていた、ハリウッドでのお仕事。
夢の第1歩を踏み出そうってわけです。

でも、私はマスターの事が気になって、正直言って、このままハリウッドへ
行っていいのか迷っていました。

(空港内環境音 SE)

(合図出します)

かにゃん

さてと…搭乗まで、もう少し時間あるな…

あっちの事務所の社長とマネージャーへのお土産…これで大丈夫かな…

うん…何買えばいいのかわからないから、かるかんまんじゅうにしちやっただけど大丈夫よね。あたしかるかん好きだもん。

うん、やっぱ、つけあげも買ってくかな…

そうだね、そうしよう！つけあげ！おいしいもんね。

すいませーん！

あの、これって、どのくらい日持ちしますか？

(空港内環境音 ストップ)

(合図出します)

かにゃん (回想)

なんだか落ち着きませんでした。

マスター来たらどうしよう…

マスター来なかったらどうしよう…

あ…あ…あ…「アタシを止めに来て」なんて…

なんであんな事言っちゃったんだろう。

ちゃんとお別れしてくるんだったかな。

(間を開けて テンション落として)

マスター…

来てくれないのかな…

(食器を洗う音SE)

(合図だします)

赤岩ちゃん
マスター！ 本当に間に合わなくなっちゃいますよ。
空港、行ってください。行って上げてください。

マスター
ああ、もうこんな時間か…

酒屋さん、遅いな…リキユール、いくつか注文してたのにな…

赤岩ちゃん
マスター！！！！

マスター
赤岩ちゃん…

無理だよ…僕には無理だ。夢を差し置いて、自分と一緒に居てくれなんて…
僕じゃなくても、きつと誰しも言えないんじゃないかな？

赤岩ちゃん
これ… 見てください。

(食器を洗う音SE ストップ)

マスター(回想)
赤岩ちゃんが僕に渡したのは、写真付きの絵はがきだった。

いつだったか店の中でかちゃんと一緒に撮影した写真。

あ、僕、怪我してるな…ああ、そういえば誰かと勘違いされて、かちゃんに殺されそうになった事あったっけ。なつかしいな。

いたずらのようなデコレーションが施された写真には、かちゃんからのメッセージが銀色のペンで書かれていた。

かちゃん(エコー)
「マスター大好きだよ。この時間がずっと続きますように。はあとw」
(PX チェック ZIKU)

マスター！行かないのはダメです。

まずは、かちゃんに会ってあげてあげてください。

色々臆病すぎますよ。怖がるのは、踏み出してからでも遅くないです！

(ちよっと間をあける)

マスター
赤岩ちゃん、ごめん…今日はちよっと体調悪いのでお店しめるわ！

ちゃんと、今日の分のお給料出すから…僕、先に出るんで、
鍵だけよろしく…！

(阿部真央 走れ！)

一度ブレイクします。-----

アイドルお忍びバー時空 後半

マスター（妄想）

お店を出たのは夕方4時15分。かにゃんが出発する時間は5時：空港までは一時間：そこからかにゃんを探して：というか20分前になれば飛行機への搭乗も始まっているだろうし、とつてい間に合いそうにない。でも、そんなのは関係なかった。とにかく空港へ行こう！会えるか会えないか動く前にそんな事を考えるのはやめよう。

タクシートの運転手さんはとてもいい人で、できる限り急いでくれた。

それでも空港までは50分ほどかかり、時計の針は5時5分を過ぎようとしていた。

（空港内環境音SE）

マスター

やっぱり、間に合わなかったな。
かにゃん、来てほしかっただろうな。

もしかしたら、ジヨロウグモを探しにいつてしまったかなえの奴も、本当は止めてほしかったのかもな。僕と一緒に居てくれて言ってほしかったのかもな。

そうか…そうだったのか…

あいつが突然「ジヨロウグモを探しに旅に出る」なんて無茶苦茶な事、言い出したのも、止めてほしただけだったのかもしれない。

それなのに僕は「いつてらっしゃい」なんて、笑顔で見送っちゃったもんだから、引っ込みつかずに、行っちゃったのかもしれないな。頑固なところあったからな…

ああ…僕は何も変わってない…なにもわかってやれてないんだ。

かにゃん

マスター！

（空港内環境音SE）

（曲のため）PXチェック）

幻聴かと思うより先に、反射的に振り向いた僕の目の前には、いるはずのないかにゃんが立っていた。

マスター（妄想）

来てくれたんだね！マスター……！！

（小田和正 ラブストーリーは突然に）

(PX絞ります)

マスター

かじゃん！どうして??もう出発の時間は過ぎてるのに…

かじゃん

えへへ…時間間違えてた…6時出発だったよ。

マスター

あ、あ、そうなの？ よかったー

かじゃん

マスター、来てくれて本当にありがとう。

でも…あたし行くよ！ハリウッド行ってくる。

だって本当は5時のつもりだったわけでしょ？その時間にはマスターは間に合いませんでした。なのでお姫様は遠い異国の地へ旅立っていくのでありますw

マスター

ええ??そんなあゝ意地悪だなゝゝ

かじゃん

あはは、冗談冗談。

なんかね、マスターの顔みたら決心ついたよ。

マスターがいろんな覚悟してくれて、ここにきてくれた。

そしたら、あたしも覚悟足りなかったなって思えたの。

マスターの覚悟を受け取る覚悟。

怖くなって思ったよ。後悔するのが…。

マスターもこんな気持ちだったんだろうなって。キョロキョロ、マスターがあたしを探してくれている後ろ姿見ていてそう思った。

マスター

かじゃん…

かじゃん

だからっ！行ってくるの！

自分で決めたの。だから行ってくる。

あたし、マスターにそういうの投げちゃってたね。ごめんね。

マスター（回想）

なにも言えませんでした。
彼女の瞳は、少し赤くなっていたけど、しっかりとした決意みたいなものが見えたから…。

だから、なにも言えませんでした。

かちゃん

そろそろ行くね！

本当に、本当にありがとう。来てくれてうれしかった。

日本に帰ってきたら、必ずお店に顔だすから。

マスター（回想）

そして彼女は、何度も何度も手を振りながら、搭乗口へと消えていきました。
一人になった僕は、ただただ泣きました。

（機内アナウンスSE フェードイン）

（合図だします）

かちゃん

マスター来てくれた…嬉しかったな。

ん？あ、マスターだ！ちゃんと最後までお見送りしてくれてる。もう、どんだけあたしの事好きなんだようw

ん？何してるのかな？応援？応援団みたいなアレ？

手を大きく上げたり…下げたり…

あああ！…！あああ！…！…これっ！…これって！！

手旗信号（てばたしんごう）だ！！あたしが手旗信号読めるってマスター知ってたの？

えーっつと？

「いくな いつしよに いてくれ」

行くな…一緒に…いてくれ…（確かめるように）

（泣いてください）

うええーん、うええーん

マスター好きだよ…本当に好きだよ…

帰ってくるから！ちゃんと帰ってくるから。

待ってて…絶対待っててね！！

---終わりの---